様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 １４ 日現在

機関番号：３２８０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２６６２

研究課題名（和文）ソーシャルネットワークアプローチによる日本語教材開発

研究課題名（英文）Japanese Language Educational materials research by Social network Approach

研究代表者
清水　秀子（SHIMIZU, Hideko）

嘉悦大学・経営経済学部・教授

研究者番号：７０７０７７７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：ソーシャルネットワーキングアプローチ（以下SNA）と日本語教育および教材開発研究をした。當作靖彦の『SNAと日本語教育』の講演会と研究会を開催した。SNAを用いた日本語学や異文化理解についての事例、ディジタルメデイア教育から多様の教材を研究した。SNAに基づく実践報告を多数の国際的な学会で発表、出版をした。２９年には鈴木孝夫氏講演会「日本語は世界の人々をつなげる」を開催した。また「SNAと日本語教育報告論集」を出版。SNAの根幹をなす『外国語学習のめやす』の英訳を完成した。さらに、SNA研究会、WebsiteによるSNAの日本語教育の普及を目指す。

研究成果の概要（英文）：We have studied on educational materials and conducted research of Social Networking Approach(SNA) of Japanese language teaching. The framework of the current study was based on the theory of SNA proposed by Dr. Yasuhiko Tohsaku. We held the symposium on SNA, and conference. We collected many approaches and ideas for teaching materials on SNA and published a book. We also invited Takao Suzuki for a talk on Japanese language in the world. We have translated “Gaikokugo gakushuu no Meyasu” into English “Foreign Language Standards 2012” We have started creating website for SNA research.

研究分野：第二言語習得研究、特に漢字教育と学習とテスト開発、日本語教育、外国語教授法、SNAアプローチ

キーワード：SNA　日本語教育　つながる

1．研究開始当初の背景

多文化共生や世界のグローバリゼーションが進み、日本語教育の現場にも新しい言語教育や教授法が求められている。
日本語教育の現場ではコミュニカテイブ・アプローチ（Canale and Swain,1980）が主流である。しかし、教室活動に依存した言語教育だけなく、現場に求められるコンピテンシー（問題解決能力、協働力、異文化適応力、高度な思考、自律的に学習を進める力、などの行動特性）を備えた人材の育成が求められている。

このような課題に向け、ソーシャルネットワークアプローチ（當作 2013、以下 SNA）の導入が語学教育の新しい方向性として提案された。つまり教師と学習者、社会との幅広い相互交流を通じて問題発見や課題解決をしていくつながりから語学能力と人間力を総合的に高めていく方法である。また、様々な経験則を集約しながら、より効果的で汎用性のある教材開発へ結びつけていく努力も必要である。日本語でコミュニケーションができる多文化・多言語背景の人材の養成に向け、SNA を用いた教授法と実践、さらにはその評価と効果についての調査研究が求められている。

清水は米国大学にて、日本語教授法や日本語授業を担当しながら、日本語教師や学習者を対象に調査研究を行ってきた。異文化コミュニケーション促進のための国際的な教育プロジェクトも研究し、ハワイ大学やハヴァフォード大学とのサイバープロジェクト（2000）を機に、ICTを用いた日米の学生交流を10年以上継続している。

白鳥は、ソーシャルメディアやモバイルメディアの黎明期から ICT を用いた教育、社会学的調査を実践している。今後は SNA のアプローチを初年次教育におけるジェネリックスキル（社会人基礎力）の育成へ応用することを検討している。2013 年に、こういった経験から SNA による学習効果についての議論を重ねるようになり、本研究計画を立案するに至った。

2．研究の目的

グローバル社会で多文化共生する人材の育成にむけ、ソーシャルメディアを使った日本語教育教授法を開発する。世界の教師や学生をソーシャルメディアでつなげ、日本語を用いて「問題解決・協働・異文化交流・高度な思考・自律学習」を推進する教材を作り、教育効果を測定する。

（１）ソーシャルネットワークアプローチ(以下 SNA)と呼ばれる語学学習・異文化理解の事例研究を行う。（２）国内外の日本語教師のネットワークをつくりながら、ワークショップを開催する。

（３）教材の試作と運用を実践し、教師と学習者の双方の成長を量的・質的に評価する。（４）学習効果が見込める教材を指導集やモデルとしてまとめ、教師・研究者に公開する。

３.研究の方法

(1) SNA を用いた語学学習についての先行研究・事例のレビュー

SNA に関連する文献や、21 世紀のビジネスやグローバル社会で求められるコンピテンシー（問題解決能力、協働力、異文化適応力、高度な思考、自律的に学習を進める力、などの行動特性）についての文献の整理を行う。

（２）SNA についての第一人者の當作靖彦教授のエキスパートインタビューを行う。上記の調査活動をもとに、SNA 型授業を嘉悦大学にて行う。異文化理解を深めることができる演習を調査してきた SNA 教材事例のいくつかを実践し、経験知を育む。

（３）SNA を用いた語学学習に関するワークショップの開催。『SNA を用いた語学学習や異文化理解に関するワークショップ』で、国内外における SNA を用いた語学教育や異文化理解についての事例、本研究の調査成果、その他の先端的なデジタルメディアを用いた教育的試みの発表を募る。

さらに、これを機に、ワークショップの参加者を中心にしたインターネット上のコミュニティ形成を進める。

（３）SNA を用いた日本語教材の試作と運用

ワークショップに参加した教師・研究者を中心に、SNA を用いた日本語教材の試作を進める。利用するデジタル機材や、メディアの特性を活かした表現、教師側が学習者に向けて発信するインストラクション、学習者同時の対話を促すファシリテーションなども検討する。試作した教材は、協力教師・研究者に配布する。

（４）教材についての量的・質的分析を通じた評価を研究する。　SNA 教材の評価に向け、(A)量的分析、(B)質的調査、そして(C)学習効果測定の３つの視点から分析を行う。(A)教材を用いて行われた学習コミュニケーションについては、記録された各種のログ（例えば書き込みコメント、アクセス頻度の記録、感情を表す「いいね」などの情報、及びに学習を進める上でアップロードされた画像やビデオなどのデータ）をもとに、ネットワークログ分析を行う。コミュニケーションの様子を類型化し、「学習が活性化した教材やイベント、きっかけ」を時系列に並ながら学習過程を見ていく。(B)教師・学習者双方に与えた心理的な影響や、モチベーションへの影響、また「文化背景の違いによる認知スタイル」などについては、教師・学習者へのインタビューを行いグランデッドセオリーなどの質的分析から描き出す。(C)さらに、教材が語学習に与えた影響や、教師・学習者それぞれの「成長の度合い」を図る効果測定を行う。教材

利用の事後に行うアンケート調査の比較や、日本語能力測定テスト(SPOT,小林・酒井2012)、「自律学習の評価指標（ハワイ大学National Foreign Language Resource Centerにて作成にした指標，清水2013）」を組み合わせた分析を行う。

これら３つの分析視点によるトライアンギュレーションを行うことで、SNAを用いた日本語教材についての多角的な評価をする。

（５）教材のモデル化とデータベース化、インターネットでの公開

語学学習に良い効果が見られた教材のサンプルやその運用方法、遂行上の課題、教師と学習者のコミュニケーションを支援する方法、利用するデジタルメディアなどについて整理し、他者も利用しやすいモデル教材（実践事例集、指導におけるガイドラインなど）にまとめる。日本語版、英語版、で、インターネット公開することを予定している。

4．研究成果

平成２７年度(2015)

SNAを用いた語学学習についての先行研究・事例のレビューをした。

ソーシャルネットワークアプローチに関連する文献や、21世紀のビジネスやグローバル社会で求められるコンピテンシー（問題解決能力、協働力、異文化適応力、高度な思考、自律的に学習を進める力、などの行動特性）についての文献の整理を行った。

日・米の日本語教師を中心に、各教師が実践しているSNAを導入した教授法や教育を進める上での課題について事例調査を進めた。教育事例だけでなく、近似のコミュニケーション事例についても調べていった。

例えば、嘉悦大学の留学生と日本人学生の「基礎ゼミ授業」を定期的に観察し、分担者の白鳥教授とFacebookやLINEを通じて異文化理解や語学習得を促進するコミュニケーション活動などを近似の事例も観察研究した。

５月30日に日本語教育学会にて　SNAについての第一人者である當作靖彦教授（カリフォルニア大学サンディエゴ校）にインタビューを行った。インタビューを分析し、SNAの目的、特徴、２１世紀教育との関連が明らかになった。また、８月５日から１０日まで米国で開催された学会に参加してSNAの動向や事例について當作靖彦教授その他にヒアリングし、同アプローチについての理解を深めた。

2015 SIETAR Japan 30th Annual Conference 2015 年 異文化コミュニケーション学会第30回年次大会9月20日(日)に『ソーシャルネットワーク理論によるサイバースペースを通しての 日米学生との異文化コミュニ ケーション』を発表した。

下半期の9月～1月に、清水はSNA型授業「異文化間コミュニケーション」の授業を嘉悦大学にて行った。米中大学生が日本語を学びつつ異文化理解を深めることができる演習を実践して調査した。授業内容は下記の通りである。

1、2回：異文化間コミュニケーションの必要性
3、４回：コミュニケーションの定義とメカニズム
5回：言葉によるコミュニケーション
6回：日米ビジネス・コミュニケーション
7回：非言語コミュニケーション
8回：可視･不可視化文化：価値観と文化的特徴
9回：異なる文化の相違点のとらえかた
10回：異文化への理解
11回：異文化適応：モデルとプロセス
12-14回：プロジェクト。結果を学会では発表した。

2015年度の白鳥の授業「留学生基礎ゼミ」においてSNA型の授業を研究し、授業では日本語力とつながる力の育成を行った。目的はSNA（當作，2013)の枠組みを基に「つながる」能力、社会力を開発し、言語を使って実際に社会活動をし、「つながる」学習活動を行うアプローチの実践と調査を行った。課題は（１）留学生は基礎ゼミの体験での学習（２）日本語力、キー・コンピテンシー、授業体験の関係と学びのプロセス。大学内や大学外でグループワークとフィールドワークを行った。大学内では同学年と先輩と活動を行い、大学外では企業メンバーと活動を行った。授業の前半では教室で、ロジカルシンキング、傾聴スキル等を学習し、後半は学外でのビジネスの実践を通して、自律学習、協働力、問題解決力を養成した。

研究方法：

Participant Observer(参加型観察者）によるデータ収集・pre-post PROG test

日本語授業成績、基礎ゼミ成績・半構造化インタビュー、LINEの会話・授業観察と授業外観察（目白商店街、フリーマーケット等）

結果

１）14人の留学生の日本語力、コンピテンシーの推移には個人差が大きかった。

２）日本語力もコンピテンシーも向上していた３人の留学生はともにポジティブシンカーでモチベーションがある。日本語力は向上したがコンピテンシーの評価は下がった留学生もいた。コンピテンシーの評価は主観的、心理的評価もあるため、長期的な観察が必要である。

３）体験を通して学生同士、地域の人、日本人学生と『つながる』過程があり、日本語力が向上した

４）協働プロジェクトでは「協働すること」の体験を通して下記のプロセスで学習

５）①文化摩擦　②傾聴、ロジカルシンキングに基づき、意見を伝える③共通の課題達成のために協働する力を身につけた

６）リーダーやSAの存在の大きさ、最近接領域の発達と「つながる」ことを学習した。

2016年３月に米国シアトルにてAATJ(American association of teachers of Japanese)でSNAの視点からみた留学生の「つながる」社会力の育成プロセスの演題で発表した。

平成２８年度（2016）

6月12日に日本言語政策学会第18回研究大会第5分科会で清水は「多言語多文化背景の学生によるサイバースペース・プロジェクト』について発表。當作靖彦氏は「人、モノ、社会が

つながる言語教育」岡本能里子は「多言語多文化共生社会構築に向けての「リテラシー」再考」を発表。

６月２５日にSNAについての情報・教授法・実践の共有を図るため『ソーシャルネットワーキングアプローチと日本語教育：當作靖彦氏のセミナーと研究発表会』を開催した。當作教授を基調講演者とし、その他、日本を始め米国、欧州、アーストラリアなどで日本語教育に携わる教師・研究者による次の16件の口頭発表があった。

① 初級日本事情クラスにおけるビデオプレゼンテーションの導入とその効果
② 「他者の発見」「自己の発見」「つながりの実現」を目指して：　「3X3+3」を指標にした日本語上級者のためのポスターセッションプロジェクト
③ 「他者の発見」「自己の発見」「つながりの実現」を目指して：　「3X3+3」を指標にした日本語上級者のためのポスターセッションプロジェクト
④ 日本語学習者による社会貢献の可能性を探る：PBLL (Project Based Language Learning)の場合
⑤ アウトリーチ教育活動への参加を通じた留学生の学び　－生涯学習的な視点から－
⑥ 米国とスウェーデンの日本語学習者をつないだ実践：アイデンティティをテーマにした取り組み
⑦ 「おもいからうまれくることば」を問う　－初級レベルからの言語活用学び場デザイン－
⑧ ソーシャルネットワーキングアプローチと滞日難民　ー 社会的孤立に向き合う日本語教育 ー
⑨ ICT ツールズを用いた学習者のつながりの取得とネットワーク分析
⑩ 地域を舞台にしたプロジェクト型授業の実践
⑪ ＳＮＡ実践を通じて習得する日本語リテラシー
⑫ ソーシャルネットワーキングアプローチ（SNA）の観点から検証した「縦割りグループ活動」の評価 ―日本人学生をグループの一員とした試みー
⑬ グローバル・コンピテンスを養う SNA ビジネス日本語教育
⑭ グローバル市民育成を目指した日本語教育
⑮ SNA のコミュニケーション能力
⑯ 中等教育実践例 -「つなげよう」から「つながった」へ

国内外におけるSNAを用いた語学教育や異文化理解についての事例、実践報告・研究発表、その他の先端的なデジタルメディアを用いた教育的試みなど多様な発表があった。

筑波大学の日本語能力測定テスト(SPOT,小林・酒井 2012)研究に携わった。「多言語背景の児童を対象とした日本語力診断テストの開発研究：年少者漢字テスト」の開発に携わった。米国日本語補習授業校での漢字テストの実施と結果」のタイトルで多言語背景の児童を対象とした開発した漢字テストの海外の学校での試験的実施と結果について JSL 漢字学習研究会で発表。

SNA の理論的枠 組みを言語教育、教育学、心理学の側面から考察し、日本語教育で下記の実践例(岸本)を研究した。

実践例(1)「つながる」重視の夏期集中講座での活動 a.既得言語能力を更に磨く為にスカイプを利用して在日本の日本人学生と直接対話する。b.日本人コミュニティとの協働作業 期末小論文執筆にあたって、日本人コミュニティからのインプットを加える事を条件とする。

実践例(2)フィルムを教材にした日本事情クラス a.前作業:関連資料、シナリオの一部読解、ワークシートによる内容理解 b.フィルム鑑賞:日本語音声を楽しむ c.後作業:内容分析作業。日本文化という宝の山の発掘作業にも似て、学生は自国文化との比較により日本社会と強くつながることが出来た。　実践例(3)即戦力を養うビジネス日本語クラス a.日本を創った先駆者の文献を読み、日本経済の成り立ちを歴史的に理解する活動。b.現代日本社会を理解するための企業研究活動・新聞・インターネット等メディアからの資料取得し、日本企業の急速なグローバル化と伝統的な体質を学ぶ活動である。c.模擬就職試験活動・日本人学生の就活実情を知り、日本の会社文化を学んだ。現役の日系企業駐在員を面接官に依頼し模擬就職試験を実施。８月には ICJLE 世界大会で『SNA の理論と実践：［つながる］日本語教育』について岸本俊子氏と発表。

９月から１２月にかけてワークショップの発表参加者・協力者に論集投稿を募集、長期的な情報交換を行うためのネットワークを拡大しながら、本研究の継続的発展を目指すため『ソーシャルネットワーキングアプローチと日本語教育：當作靖彦氏講演と研究発表会報告論集』の出版に向けて、投稿報告書の査読、編集作業を行った。

10 月に SNA 理論を基盤とした論文『短期留学プログラム参加者における異文化理解と学習動機付けの変容』を木村登志子･清水秀子を出版した。

2016 年秋学期の白鳥の授業「ベーシックスキルトレーニング」を研究した。

研究の目的

学習支援を目的とした教師による学習評価と学生の自己評価（白鳥分析）及び漢字・語彙力と日本語会話力の評価（清水）を行った。評価の特徴は①評価の重点は学習の過程　②評価は設定したルーブリックによる能力指標　③タスクを行い実践能力を評価　④応用力、総合力などの能力も評価（販売実践・プレゼンテーション）
⑤　高度の思考力も評価　⑥「自己評価」「グループ評価」外部評価」（他のクラスの学生・地域の方々）（當作・中野 2012）

結果

評価を準備段階、予算策定、販促準備で実施し、それぞれの段階で、企画・実践・報告のサイクルを行ない、それぞれのスキルプロセスをルーブリックで評価した。語彙・漢字・会話表現の小テストも形成評価として実施した。
ビジネススキルの評価の準備段階でのルーブリック例を下記に示す。

	目的以上達成	目標を達成	目標まで後少し	努力する必要
準備段	正確に	ビジネ	ビジネ	ビジネ

階： 計画工程表・支収計画書など	ネのを ジ上題し、で ビス問把握解き前をえな（	度ま切算字すの費設詳全計体フ共示で 釈た 年踏適予黒出め料を し、なの（全シ と提施た をた材等定細員画のトに実き	ス問把解き 上題握釈た 適予字る定画に実き	の把あでか はし字までい 、実き 上題がりな た算定黒算はてい）画で ス問握まきっ予設（計できな計施た
				の把でか がで計施な 上題がな た算定ず、実きった ス問握きっ予設き画でか

自己評価では学生の自立性を高め、学習に責任を持たせ、自己学習へのモニター、内省への機会を与えた。教員と学生の評価において、「経営発表評価では教員の評価の方が高かったグループがあった。
清水･白鳥は 2017. 3/16 日 AATJ, Toronto で発表した。

平成２９年度
2017 年 4 月から英語圏の英語を母国語とする日本語教育者及び外国語教育関係者のために英語に翻訳し多くの日本語教育関係者に読んでもらうため、『外国語学習のめやす　2012―高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』當作安彦・中野佳子著、国際文化フォーラム出版の英文翻訳を Jesus Solis と始めた。この著書はソーシャルネットワーキングアプローチ（SNA）の根幹を成している。１２月翻訳は完成。現在出版に向けて装丁を準備中。

6 月 10 日嘉悦大学にて鈴木孝夫氏（慶應大学名誉教授）の講演会を開催
演題：「日本語は世界の人々をつなげる」
日本語が世界の人々とつながるということがどういうことなのかを独創的な視点から日本文化タタミゼや日本語による発信、日本語による多様な文化的背景を持つ人々との相互作用などを考察した。

６月から SNA 教授法研究として「学生をつなぐコミュニケーション活動 MOZO の実践」をバンクス祥恵と嘉悦大学の留学生クラスで行いインタビュー調査し質的分析をした。結果は下記の通りであった
インタビューの分析結果
ランダムに選ばれた中国人男子と女子学生・ネパール男子、ベトナム・女を調査した。学生の発話を文字化した上でキーワードを抽出し、それらを分類した結果、発話の内容を次の 3 つに集約することができた。
（１）「大勢の人と話すことに対する苦手意識およびそれを克服した時の楽しさ」でったというのが共通した意見だった。
活動を通して、自分の日本語が相手に理解され、徐々にクラスメイトとのつながりが芽生えてきたことによって、その不安や戸惑いは喜びと興奮に変化していった。
（２）「日本語で話すことに対する自信の芽生え」である。
（３）「コミュニケーションの重要性に対する気づき」である。コミュニケーションが成立したからこそ、「一見無関係に見えた全員の絵がつながる」という想像を超える結末、喜び、興奮を勝ち取ることができた。論文執筆中。

７月に『ソーシャルネットワーキングアプローチと日本語教育：當作靖彦氏講演と研究発表会報告論集』の査読を行い、出版を完成、２８年度の発表会出席者、関係者に配布した。

８月、早稲田大学にて CASTELJ にて『アメリカ人留学生が日本人学生との交流を通して「つながる」プロセスーＳＮＳツールを用いた教室内外での交流』を松橋由佳・清水秀子が発表した。
木村が 2016 年８−９月に随行したフィリピンでの短期語学留学参加者におけるグローバル社会とつながる英語学習動機付けの変容を研究し、SNA の理論的枠組みによって分析した。
プログラムは現地人との交流を中心とした活動型プログラムで参加者は：引率担当の大学生８名現地プログラム他大学からの１２名（２０人）
方法：インタビュー・動機付けアンケート・観察・ジャーナル
結果：言語領域・文化領域・グローバル領域量的変化：ドルニュイの 17 カテゴリーの事前と事後の学習動機付けの変化も観察された。
平成３０年２月に SNA ウエブサイトを立ち上げた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）
1.<u>白鳥成彦</u>・<u>清水秀子</u>（2017）「ICT ツールズを用いた学習者のつながりの取得とネットワーク分析」『ソーシャルネットワーキングアプローチと日本語教育研究発表報告論集』p89-100 査読有　嘉悦大学
2.當作靖彦(2017)「グローバル時代のつながる言語教育：ソーシャルネットワーキングアプロ-チ：理論と実践」『ソーシャルネットワーキングアプローチと日本語教育研究発表報告論集』p5-16 査読有　嘉悦大学
3.バンクス祥恵（2017）「初級学習者の『つながる』日本語事情教育」『ソーシャルネットワーキングアプローチと日本語教育研究発表報告論集』p17-26 査読有　嘉悦大学
4.岸本淑子(2017)「グローバル・コンピテンスを養う SNA 日本語教育：ビジネス編」『ソーシャルネットワーキングアプローチと日本語教育研究発表報告論集』p49-58 査読有　嘉悦大学
5．松田結貴「SNA 実践を通じて習得する日本語リテラシー」『ソーシャルネットワーキングアプローチと日本語教育研究発表報告論集』p59-72 査読有　嘉悦大学

6.酒井たか子・清水秀子(2016)「多言語背景の年少者用漢字テストの作成」『JSL 漢字学習研究会誌』　査読有　第８号 pp.63-68
7.木村登志子・　清水秀子（2016）.「短期留学プログラム参加者における異文化理解と学習動機付けの変容」　『嘉悦大学研究論集』　査読有　第 59 巻第１号 109 号 pp.75-100
8.松田結貴（2016）「SNS 世代の女性シンガーが歌うＪポップと英語へのコードスイッチングの機能」『ことばと文字 5』査読有 pp.116-126．くろしお出版
9.松田結貴（2014）「メディアの文法：ヴォイスとアイデンティティの構築：英語圏の日本語学習者の視点から」『ことばと文字 1』査読有 pp.28-37．　くろしお出版

〔学会発表〕（計１６件）

1.松橋由佳・清水秀子　「アメリカ人留学生が日本人学生との交流を通して「つながる」プロセス -SNS ツールを用いた教室内外での交流- 」　CASTELJ 2017 第７回国際大会早稲田大学 2017

2.清水秀子・白鳥成彦　「販売実務のビジネス・スキルと日本語力の学生と教師による評価の考察」AATJ ANNUAL SPRING CONFERENCE 2017, 2017

3.當作靖彦「形成的評価が生む新しい日本語学習」AATJ Seminar 2017 ANNUAL SPRING CONFERENCE 2017

4.松田結貴「ジャンルに基づいた漢字習得のための学習者主体の評価活動」AATJ 2017 ANNUAL SPRING CONFERENCE 2017

5.木村登志子・清水秀子　「第二 言語圏フィリピンでの短期語学学習参加者におけるグローバル社会とつながる英語学習動機付けの変容」JASET 第 56 回国際大会　2017

6.清水秀子・岸本淑子「ソーシャルネットワーキング・アプローチの理論と実践 ―グローバル・コンピテンスを養う日本語教育にむけて―」日本語教育国際研究大会　バリ 2016

7.酒井たか子・清水秀子「年少者用日本語テストの開発-アメリカ補習校における SPOT・漢字テストの試行結果を中心に-」MHB（母語・継承語・バイリンガル教育）2016 年度研究大会 2016

8.清水秀子「ソーシャルネットワーキングアプローチの理論と実践：「つながる」日本語教育」CJLEA annual　conference, Denver　2016

9.清水秀子・白鳥成彦「SNA の視点から見た留学生のつながる社会力の育成プロセス」AATJ ANNUAL SPRING CONFERENCE Seattle 2016

10.當作靖彦「ソーシャルネットワーキングアプローチ: 人、モノ、情報、社会、文化をつなぐ言語教育」AATJ ANNUAL SPRING CONFERENCE Seattle　2016

11.松田結貴「ソーシャルメディアによる言語の社会化と日本語談話表現の習得」AATJ ANNUAL SPRING CONFERENCE Seattle　2016

12.岡本能里子「社会を組み替え、構築するデザイン力の育成 」AATJ Annual Spring Conference in Seattle

13.清水秀子「多言語多文化背景の学生によるサイバースペースプロジェクト」日本言語政策学会第18回研究大会　2016

14.當作靖彦「人、モノ、社会がつながる言語教育」日本言語政策学会第18回研究大会 2016

15.岡本能里子「多言語多文化共生社会構築に向けての「リテラシー」再考」日本言語政策学会第18回研究大会　2016

16.清水秀子「ソーシャルネットワーク理論によるサイバースペースを通しての日米学生との異文化コミュニケーション」2015 SIETAR Japan 30 Annual Conference 2015

〔図書〕（計１件）
清水秀子（2017）『ソーシャルネットワーキングアプローチと日本語教育研究発表報告論集』嘉悦大学 128 ページ

〔その他〕
ホームページ等
SNA 研究会
http://www.sna.tokyo

６．研究組織
(1)研究代表者
清水　秀子（SHIMIZU, Hideko）
嘉悦大学・経営経済学部・教授
研究者番号：70707778
(2)研究分担者
白鳥　成彦（SHIRATORI, Naruhiko）
嘉悦大学・ビジネス創造学部
研究者番号： 70552694

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：

(4)研究協力者
當作　靖彦（TOHSAKU, Yasuhiko）
松田　結貴（MATSUDA, Yuki）
岸本　淑子（KISHIMOTO, Toshiko）
松橋　由佳（MATSUHASHI, Yuka）
木村　登志子（KIMURA, Toshiko）
岡本　能里子（OKAMOTO, Noriko）
バンクス祥恵（BANKS, Sachie）